

[研究報告]

高齢者と子どもの世代間交流に関する文献検討

角 マリ子* 木下 陽子 福永 寛恵

Study of articles on Intergenerational Program between elderly people and children in Japan

Mariko SUMI, Yoko KINOSHITA, Hiroe FUKUNAGA

要旨

本研究は、本邦における高齢者と子どもの世代間交流について報告されている20件の文献を概観し、研究の動向、試みの実態と成果を整理し、今後の研究の方向性、高齢者および子どもへの支援についての示唆を得ることを目的とした。

1. 高齢者と子どもの世代間交流について報告された文献は、高齢者と子どもの世代間交流の実態や成果に着目した文献に分けられ、子どもに関する世代間交流の成果を明らかにした研究は少なかった。
2. 高齢者と子どもの世代間交流の実態とその成果については、世代間交流の成功につながる企画の要素をすべて明記しているものはなかったことから、世代間交流のどのような要素が高齢者や子どもに影響を与えているかについて検証が求められる。
3. 今後、高齢者や子ども、その家族に対する支援のあり方については、青年、中・高年世代が連続性の繋がりの中での世代間交流を検討することが必要である。

キーワード：世代間交流 高齢者 子ども

I 緒言

少子高齢化という重要な社会問題に直面する我が国では、その対策として、高齢化については、地域包括ケアシステムがあり、可能な限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていくことができるよう支援していく地域の体制を構築している。この地域包括ケアシステムについて、具体的な4つの支え方を示している。それらは、ボランティア活動や住民組織の活動等の自発的な活動を意味する互助のほか、自分で自分の生活を支えることを意味する自助、介護保険に代表される社会保険制度及びサービスを意味する共助、税による公の負担を意味する公助である¹⁾とされている。

また、少子化については、健やか親子21（第2次）を策定し、すべての子どもが健やかに育つ社会を目指すために、3つの基盤課題と2つの重点課題を設定している。3つの基盤課題とは、子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくりのほかに、切れ目のない妊産婦・乳幼児への保健対策、学童期・思春期から成人期に向けた保健対策であり、2つの重点課題とは、育てにくさを感じる親に寄り添う支援、妊娠期からの児童虐待防止対策である²⁾。これらの対策に共通するものは、地域包括ケアシステムにおける「互助」や、健やか親子21における「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」に表れているように、人々が日々の生活を営む地域であり、地域をどのようにつくっていくかが焦点になるといえ

所属

熊本保健科学大学保健科学部看護学科

*責任著者：sumi@kumamoto-hsu.ac.jp

る。

そのような中、内閣府の調査によれば、子育てをする人は、地域の支えが重要であると感じている人がほとんどであり、その内容として、子どもの防犯のための声かけや見守り、子育てをする仲間や悩みを相談できる人・場、子どもと大人と一緒に参加できる地域の行事等を挙げているとしている³⁾。一方、高齢者は、生活の充実感を重視し、その充実感を友人や知人と会合・雑談時等を感じるとし、加えて若い世代との交流への意欲を持ち、そのためには交流機会の設定等を必要としているとされる⁴⁾。このように、子育て世代・高齢者ともに地域の支えを重要視し、また自分もそれに参画する意思をもっているといえる。このような地域づくりを実践する活動に、世代間交流がある。

少子高齢化という社会問題を抱えつつも、地域包括ケアシステムや健やか親子21が掲げる両者の考え方を実現するために、地域づくりを実践する活動である世代間交流に着目する意義は高い。高齢者と子どもの世代間交流について、これまで多くの実践報告がなされ、その実態と効果、課題について整理・統合した文献検討があるが^{5,6)}、これらは、研究分野や研究年、世代間交流の企画者が指定されているものや、世代間交流の詳細な実態の解明には難しいものであった。

II 目的

世代間交流の研究の動向の文献検討から、世代間交流の実態と成果を分析し、高齢者と子どもの世代間交流を支援するための今後の課題を抽出する。

III 用語の定義

1. 世代間交流

草野は、子ども、青年、中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活動の主役となる活動である⁷⁾と述べているが、本研究においては、世代間交流を高齢者と子ども間とし、活動内容については同様の定義とした。

2. 高齢者と子ども

総務省統計局の行う国勢調査および人口推計で使

用される区分を参考にし、高齢者は、概ね65歳以上の者とし、子どもは、概ね0～14歳までの者とした。

3. 世代間交流の成功につながる企画

Nancyらは、世代間に意味ある人間関係を育もうとするのであれば、内容が濃く、より長期の活動が求められるとし、よい世代間交流を行うための準備と実施の際の基本的なポイントを示している。そのポイントとは、実態調査、パートナー提携、ねらい、企画、人材募集、参加者とスタッフの事前準備、実践内容、継続的な支援、効果測定としている⁸⁾。Nancyらのいう、これらの項目を世代間交流の成功につながる企画と表した。

4. 世代間交流の利点

草野は、世代間交流の利点を、(1) 子どもにとって家族や学校だけに限定された人間関係の拡大、(2) 高齢者の社会的孤立、(3) 高齢者の能力、英知、経験の社会的活用、(4) 交流を通じての地域社会の統合、(5) 歴史的・文化的交流と継承、(6) 社会問題の解決などとしている⁷⁾。草野のいう、これらの項目を世代間交流の利点と表した。

IV 方法

1. 対象となる文献の選定

対象となる文献の選定は、医学中央雑誌を使用した。検索キーワードは、「世代間交流 and 高齢者」および「世代間交流 and 子ども」を用いて検索した。出版年は、本邦における世代間交流は、1960年代から始められているとされることから⁹⁾、1960年から2018年7月までに発表された文献とした。

対象文献の抽出にあたり、検索キーワード「世代間交流 and 高齢者」によって検索された文献182件について、原著論文でない文献130件を除き、52件を選択した。それらから、本研究における世代間交流の内容を含まない文献16件、研究対象が本研究における高齢者の定義に非該当、もしくは高齢者を対象としていない文献17件を除く、19件を抽出した。また、「世代間交流 and 子ども」によって検索された文献48件について、原著論文でない文献28件を除き、20件を選択した。それらから、世代間交流の内容を含まない文献7件、研究対象が本研究における子どもの定義に非該当、もしくは子どもを対象としていない文献7件を除く、6件を抽出した。以上の過程を経て抽出された文献のうち、重複文献5件を

含め、20件の文献を本研究の分析対象とした。

2. データ分析

データの分析は、高齢者および子どもの世代間交流に関する研究の動向を調べるため、対象文献20本（表1）を精読し、対象文献から類似性と弁別性に基づきレビュー表を作成し抽出した。

それぞれの文献を掲載年ごとに集計し（表2-1・表2-2）、さらに、研究目的、研究デザインを整理した（表3）。次に、世代間交流の実態（表4）と成果（表5）を知るために、世代間交流の成功につながる企画⁸⁾、さらに世代間交流の成果を知るために、分析項目を設定した。実態の項目は、①実態調査、②パートナー提携、③ねらい、④企画、⑤人材募集、⑥参加者とスタッフの事前準備、⑦実践内容、⑧継続的な支援、⑨効果測定とし、成果の項目は、①高齢者②子どもとした。また、世代間交流の利点は、世代間交流の利点（表6）⁷⁾を参考にし、①子どもにとって家族や学校だけに限定された人間関係の拡大、②高齢者の社会的孤立、③高齢者の能力、英知、経験の社会的活用、④交流を通じての地域社会の統合、⑤歴史的・文化的交流と継承、

⑥社会問題の解決、⑦その他・高齢者／子どもとした。この分析項目について、対象文献から該当する内容を抽出した。なお、分析項目に該当しない内容が抽出されたため、その内容を明らかにし、カテゴリ化を行った。

最後に、これらの文献検討を経て得られた研究目的、研究デザイン、実態、成果、利点から、高齢者および子どもの世代間交流における研究の概要をまとめ、今後の課題を抽出した。

なお、世代間交流の実態（表4）と成果（表5）に関連が見出すことができなかつたため、本研究においてはその検討を分析から除外した。

V 結果

1. 高齢者と子どもの世代間交流についての研究の動向

1) 文献の掲載年別推移

高齢者と子どもの世代間交流について、対象文献の掲載年別推移を表1に示し、それぞれの対象文献一覧を表2-1、表2-2に示した。

表1 高齢者および子どもの世代間交流における文献の掲載年別推移

年	キーワード	「世代間交流, 高齢者」	「世代間交流, 子ども」
2002		1	0
2003		0	0
2004		1	0
2005		1	0
2006		2 (うち1件*)	1*
2007		1	0
2008		1	0
2009		1	0
2010		2 (うち1件*)	1*
2011		1	0
2012		0	0
2013		1	0
2014		1	1
2015		1*	1*
2016		0	0
2017		3 (うち2件*)	2*
2018		2	0
計		19	6
(再掲) 重複論文		5	5

*重複論文を示した

**原著論文のみ

表2-1 高齢者の世代間交流に関する対象文献一覧

著者名 (掲載年)	文献名
和田, 他 (2018) ¹⁰⁾	世代間交流が高齢者のジェネラティビティと精神的健康に与える影響
田中, 他 (2018) ¹¹⁾	世代間交流施設における利用者評価 高齢者と子育て世代の母親の語りから
村山, 他 (2017) ¹²⁾	【世代間の葛藤と多世代共生】 幼老複合施設における世代間交流の可能性と課題
南部 (2017) ¹³⁾ *	高齢者と子どもの世代間交流の意義 大阪府下および奈良県下の高齢者ケア施設職員と保育士へのインタビュー調査
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾ *	世代間交流を導入した高齢者うつ予防プログラムの開発 笑いヨガとタッピング・タッチの活用
糸井, 他 (2015) ¹⁵⁾ *	地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 CIOS-E, CIOS-C の信頼性と妥当性の検討
安永, 他 (2014) ¹⁶⁾	短期集中的な世代間交流プログラムが児童に与える影響 SD 法による高齢者イメージの検討
亀井, 他 (2013) ¹⁷⁾	聖路加式世代間交流観察 (SIERO) インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討
Kamei, et al (2011) ¹⁸⁾	Six month outcomes of an innovative weekly intergenerational day program with older adults and school-aged children in a Japanese urban community
藤原, 他 (2010) ¹⁹⁾	高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム "REPRINTS" から
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾ *	都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12ヵ月間の効果に関する縦断的検証 Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて
花井, 他 (2009) ²¹⁾	多世代間交流を目的とした水中運動プログラムの開発
立松 (2008) ²²⁾	高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策 高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究
藤原, 他 (2007) ²³⁾	児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 "REPRINTS" 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から
藤原, 他 (2006) ²⁴⁾	都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム "REPRINTS" の1年間の歩みと短期的効果
増田 (2006) ²⁵⁾ *	住民主体の子育て支援活動への検討
土永, 他 (2005) ²⁶⁾	世代間交流に関する調査研究 高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から
新田, 他 (2004) ²⁷⁾	世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義
片岡, 他 (2002) ²⁸⁾ **	世代間交流による痴呆老人の生活の質 (QOL) に対する効果の研究

*重複文献を示した

**文献に示されている用語をそのまま使用した

表2-2 子どもの世代間交流に関する対象文献一覧

南部 (2017) ¹³⁾ *	高齢者と子どもの世代間交流の意義 大阪府下および奈良県下の高齢者ケア施設職員と保育士へのインタビュー調査
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾ *	世代間交流を導入した高齢者うつ予防プログラムの開発 笑いヨガとタッピング・タッチの活用
糸井, 他 (2015) ¹⁵⁾ *	地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 CIOS-E, CIOS-C の信頼性と妥当性の検討
菅谷, 他 (2014) ²⁹⁾	老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告 近畿2府4県でのアンケート結果の分析
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾ *	都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12ヵ月間の効果に関する縦断的検証 Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて
増田 (2006) ²⁵⁾ *	住民主体の子育て支援活動への検討

*重複文献を示した

文献総数は20件¹⁰⁻²⁹⁾であり、その内容は、高齢者に関する世代間交流の文献は19件、子どもに関する世代間交流の文献は6件であり、これらには両者に重複する文献5件が含まれていた。掲載年別では、高齢者に関する世代間交流の文献は、2002年以降にみられ、年間0～3件であり、2017年の3件が最多であった。子どもに関する世代間交流の文献は、2006年以降にみられ、年間0～2件であり、2017年の2件が最多であった。

2) 対象文献の研究目的と研究デザインからみた文献の概要

高齢者と子どもの世代間交流について、対象文献の研究目的、研究デザインを表3に示した。

(1) 対象文献の研究目的

20件の対象文献は、「高齢者と子どもの世代間交流の実態」に着目した研究、「高齢者と子どもの世代間交流の成果」に着目した研究、「高齢者と子どもの世代間交流の利点」に着目した研究に分類された。それぞれの文献数は、「高齢者と子どもの世代間交流の実態」に着目した研究は18件、「高齢者と子どもの世代間交流の成果」に着目した研究は15件、「高齢者と子どもの世代間交流の利点」に着目した研究は15件であった。

(2) 対象文献の研究デザイン

20件の分析対象文献における研究デザインに焦点を当てると、質的研究は3件であり、量的研究は11件であった。また、質的研究と量的研究を組み合わせた研究は、6件であった。

表3 高齢者と子どもの世代間交流に関する対象文献の研究目的、研究デザイン

著者名(掲載年)	研究目的	研究デザイン
和田, 他 (2018) ¹⁰⁾	世代間交流が高齢者のジェネラビリティと精神的健康に与える影響を探る	量的研究
田中, 他 (2018) ¹¹⁾	世代間交流施設の持つ意義と役割を明らかにする	質的・量的研究
村山, 他 (2017) ¹²⁾	幼老複合施設における高齢者の園児に対する意識を明らかにし、高齢者に及ぼす影響を検証する	質的・量的研究
南部 (2017) ¹³⁾	世代間交流の効果や課題を知る	質的研究
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾	「世代間交流」に「笑い」と「リズムカル運動」を取り入れたうつ予防プログラムの効果を検証する	量的研究
糸井, 他 (2015) ¹⁵⁾	世代間交流の場で生じる高齢者と子どもの相互作用を観察できる尺度を開発する	質的・量的研究
安永, 他 (2014) ¹⁶⁾	世代間プログラムが与える児童への影響について検討する	量的研究
菅谷, 他 (2014) ²⁹⁾	老人福祉施設における世代間交流の最新の活動の実態を明らかにする	量的研究
亀井, 他 (2013) ¹⁷⁾	世代間交流を観察・評価するための尺度を開発する	質的・量的研究
Kamei, et al (2011) ¹⁸⁾	高齢者の健康関連 QOL とうつ症状、子どもの高齢者観を、世代間交流に参加した6か月間の評価を行う	質的・量的研究
藤原, 他 (2010) ¹⁹⁾	当該プログラムにおける保護者への波及効果を検証する	量的研究
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾	当該プログラムに12か月間継続的に参加した高齢者の生活の質、および抑うつについての経時的变化を示し、プログラムの効果を検討する	量的・質的研究
花井, 他 (2009) ²¹⁾	水中運動プログラムを開発し、結果について報告する	量的研究
立松 (2008) ²²⁾	要介護高齢者の「役割」を意図した取り組みの実態を知る	質的研究
藤原, 他 (2007) ²³⁾	“REPRINTS” ボランティアの1年間の活動が、児童の持つ高齢者イメージへの影響の有無を検証する	量的研究
藤原, 他 (2006) ²⁴⁾	“REPRINTS” の1年間にわたる取り組みから得られた知見と課題を整理する	量的研究
増田 (2006) ²⁵⁾	A地区子育て交流会の活動を開始した2年間の活動を分析する	質的研究
土永, 他 (2005) ²⁶⁾	高齢者福祉関係施設を併設する保育所における高齢者との世代間交流の実態を知る	量的研究
新田, 他 (2004) ²⁷⁾	介護福祉施設での世代間交流に参加した児童の持つ、高齢者に対する感情を知る	量的研究
片岡, 他 (2002) ²⁸⁾ *	子どもとの交流が痴呆老人の QOL に及ぼす影響を明らかにする	量的研究

*文献に示されている用語をそのまま使用した

2. 高齢者と子どもの世代間交流の実態とその成果、利点

高齢者と子どもの世代間交流の実態とその成果、利点を表4、表5、表6に示した。

1) 高齢者と子どもの世代間交流の実態

高齢者と子どもの世代間交流の実態について報告しているものは18件であり(表4), それらの文献において, 世代間交流の成功につながる企画の要素

表4 高齢者と子どもの世代間交流の実態に着目した研究の概要

著者名 (掲載年)	実態 調査	実態				継続的 効果 な支援 測定
		パートナー提携 ねらい	企画	人材募集	参加者とスタッフの事前準備 実践内容	
村山, 他 (2017) ¹²⁾	保育所と認知症 グループホーム				安全と衛生, 活動内容	散歩や挨拶等日常的交流 歌や食事等の行事を通じた交流 ゲーム等の娯楽を通じた交流活動, 発表会等を通じた活動, 行事を通じた交流活動, 芸能や伝承遊び等の交流活動, 一緒に創作
南部 (2017) ¹³⁾					感染症対策の遂行や安全の確認, 交流に対する参加意思の尊重	
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾	高齢者通所介護 施設 保育園		2か月間に3回		事前説明会	健康教育 笑いヨガ, タッピングタッチ
安永, 他 (2014) ¹⁶⁾	小学校		週2回, 1回45分, 計7回	小学校でのボランティア 活動を行っている人		児童に絵本の読み聞かせ手法の実技 指導 7回
Kamei, et al (2011) ¹⁸⁾	大学			看護教員, 地域ボランティア, 看護学生ボランティア	高齢者の心身の状態のアセスメ ント 子どもの食物アレルギー確認 一日の活動等の確認	音楽やお茶の準備 血圧や問診を行い全身状態の観察 コミュニケーション促進ゲーム, お手玉等
藤原, 他 (2010) ¹⁹⁾	小学校		週2回, 1回15~ 30分程度, 児童の 休み時間に活動		健康診査 1か月前にリハーサル	絵本の読み聞かせ会
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾			1か月4回, 1回2時間30分		各回開始前にスタッフで当日の プログラム, おやつ, 参加者個別 情報等の共有を行う 高齢者の心身状態, 同居家族, 転倒リスクの情報収集 小中学生の下校時の経路, 下校 時刻, 食物アレルギー, 見送り 場所の確認	健康観察(血圧・脈拍測定等) 相談 おやつ 世代混合対抗ゲーム等のゲーム キルトプロッチ作成等の手芸 地域にちなんだかるた創作等
花井, 他 (2009) ²¹⁾			1回60分			アクアダンス, 水中ウォーキング等
藤原, 他 (2007) ²²⁾			週2回, 児童の 休み時間に活動		健康診査	絵本の読み聞かせ会
藤原, 他 (2006) ²⁴⁾	ニーズ 調査 自治体		1~2週間に1回 程度の訪問	絵本・児童図書専門家 による基調講演とボラ ンティア募集イベント	週1回2時間のセミナーを開催	絵本の読み聞かせ会
増田 (2006) ²⁵⁾			月1回, 1回90分			茶道 日本の古き良き遊びを学ぶ からいも作りと収穫 ハトボッポ体操
新田, 他 (2004) ²⁷⁾	小学校と高齢者 施設		場所: 近隣の高齢 者施設		世代間交流活動の専任スタッフ 配置	施設入居者への挨拶, 施設見学, 運動会への招待状づくり, 施設内で野菜づくり等 10年間
片岡, 他 (2002) ²⁸⁾	高齢者施設		1回1時間			七夕会, 庭園等での交流
糸井, 他 (2015) ¹⁵⁾			交流頻度: 週1回, 1回約2時間			
菅谷, 他 (2014) ²⁹⁾	保育園, 幼稚園, 小学校					うた・合唱 ダンス・踊り ゲーム・トランプ等
亀井, 他 (2013) ¹⁷⁾	大学	高齢者: ヘルスプロ モーション 小学生: 高齢者理解 の促進	交流頻度: 週1回, 1回3時間 内容: 両世代の 希望取入れ	大学教員 ボランティア等	企画運営, 参加者の健康状態の 把握, 保護者への連絡等は教員 が行う	地域かるた・ちぎり絵等の共同制作, コミュニケーション促進ゲーム, 世代間交流書道等
立松 (2008) ²²⁾	特別養護老人 ホーム・デイ サービス等 育児サークル・ 保育園等					日常生活での交流 お誕生日会 掃除・お祭り等の地域活動等
土永, 他 (2005) ³⁰⁾	自治会・町内 会・老人クラブ ・婦人会 福祉課・福祉事 務所等		場所: 保育所, 老人ホーム等			高齢者を保育所の行事に招待 もしくは, 相手先の行事等に訪問 3~5年

*文献に示されている用語をそのまま使用した

表5 高齢者と子どもの世代間交流の成果に着目した研究の概要

著者名 (掲載年)	成果	
	高齢者	子ども
和田, 他 (2018) ¹⁰⁾	次世代の育成や世代的継承性への認識・関心 抑うつ傾向の低さ	
田中, 他 (2018) ¹¹⁾	子どもとの交流によって得る喜び・元気 いろいろな世代がいて当たり前	
村山, 他 (2017) ¹²⁾	自己充足感, 高揚感, 園児の愛らしさ, 和み・ 癒しという肯定的感情 気力の喪失, 嫌悪感, 身体への不安という否定的 感情 子供時代, 孫・ひ孫の世話や育児体験の回想	
南部 (2017) ¹³⁾	高齢者の経験値が生かされていた 子どもを見る視線や表情の変化 高齢者の精神活動の変化 高齢者の経験を想起する場 交流後の活発な態度	高齢者への子どもの自然な対応 高齢者から与えてもらうことによる子どもの 自主性の高まり 子どもの他者に対する心の成長
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾	うつ傾向の改善 身体の痛みの改善 快適度と安定度の向上	
安永, 他 (2014) ¹⁶⁾		高齢者を活動的で力強いと感じる
Kamei, et al (2011) ¹⁸⁾	うつ傾向の強い高齢者の改善	
藤原, 他 (2010) ¹⁹⁾		児童の読書推進への効果 地域づくりへの波及効果
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾	うつ傾向にある者の改善 高齢者が子どもの居場所をつくり迎え入れる 高齢者と子どもとボランティアがお互いを知る ともに参加することで刺激を受けた高齢者が素直 に子どもに感じたことを表現する 参加者にとって特別な意味のある居場所となる 高齢者・子どもが自分の役割を認識してできる ことをする 参加者(高齢者, 子ども)が主張をする それぞれの世代でも楽しむ 会を楽しみに待つ 余韻を味わう 会の外に交流が広がる	高齢者と子どもとボランティアがお互いを知る 子どもの発言が増える 参加者にとって特別な意味のある居場所となる 高齢者・子どもが自分の役割を認識してできる ことをする 参加者(高齢者, 子ども)が主張をする それぞれの世代でも楽しむ 会を楽しみに待つ 余韻を味わう
花井, 他 (2009) ²¹⁾	楽しさ 生き生きとした気持ち	楽しさ
藤原, 他 (2007) ²³⁾		持続する高齢者に対する肯定的イメージ
藤原, 他 (2006) ²⁴⁾	社会的サポート・ネットワークの増進 地域共生意識 握力向上	
増田 (2006) ²⁵⁾	孫と一緒に参加を楽しみにしている 開催日に病気をしないように気を付ける	子供たちが毎回楽しみにし興味を持つ 顔見知りになった人達に子供達が挨拶をし, 人と 人との繋がりができた 交流会で作ったものを家庭に帰ってから兄弟・ 姉妹・家族みんなで作り, 一家団欒となっている 進んで後片付けを手伝うようになる
新田, 他 (2004) ²⁷⁾		高齢者はお友達をたくさん持っているという肯定 的イメージ
片岡, 他 (2002) ²⁸⁾ *	交流中の痴呆老人の表情の豊かさ	

*文献に示されている用語をそのまま使用した

表6 高齢者と子どもの世代間交流の利点に着目した研究の成果の分類

著者名 (掲載年)	世代間交流の利点					
	子どもにとって家族 や学校だけに限定さ れた人間関係の拡大	高齢者の社会的孤立 を防ぐ	高齢者の能力、英知、 経験の社会的活用	交流を通じての地域 社会の統合	歴史的・文化的交流 を継承	社会問題の解決
和田, 他 (2018) ¹⁰⁾					次世代の育成や世代 的継承性への認識・ 関心	
田中, 他 (2018) ¹¹⁾						
村山, 他 (2017) ¹²⁾						
南部 (2017) ¹³⁾			高齢者の経験値が 生かされていた			
小林, 他 (2017) ¹⁴⁾						
安永, 他 (2014) ¹⁶⁾						
Kamei, at al (2011) ¹⁸⁾						
藤原, 他 (2010) ¹⁹⁾				地域づくりへの波及 効果		
亀井, 他 (2010) ²⁰⁾	高齢者と子どもとボ ランティアがお互い を知る 参加者にとって特別 な意味のある居場所 となる 参加者（高齢者, 子 ども）が主張をする それぞれの世代でも 楽しむ	高齢者と子どもとボ ランティアがお互い を知る ともに参加すること で刺激を受けた 高齢者が素直に子ど もに感じたことを表 現する 参加者にとって特別 な意味のある居場所 となる それぞれの世代でも 楽しむ 会の外に交流が広がる	高齢者が子どもの 居場所をつくり迎え 入れる高齢者・子ど もが自分の役割を認 識してできることを する			
花井, 他 (2009) ²¹⁾						
藤原, 他 (2007) ²³⁾						
藤原, 他 (2006) ²⁴⁾				社会的サポート・ ネットワークの増進 地域共生意識		
増田 (2006) ²⁵⁾	顔見知りになった人 達に子供達が挨拶を し, 人と人との繋が りができた			交流会で作ったもの を家庭に帰ってから 兄弟・姉妹・家族み んなで作り, 一家団 楽となっている		
新田, 他 (2004) ²⁷⁾						
片岡, 他 (2002) ²⁸⁾ *						

世代間交流の利点								
その他								
高齢者						子ども		
楽しみ等の肯定的感情	様々な世代がいて当たり前という認識	活動性の向上	嫌悪感等の否定的感情	子ども時代や子育ての回想	身体の改善・向上	楽しみ	高齢者に対する肯定的イメージ	自主性の高まり
抑うつ傾向の低さ								
子どもとの交流によって得る喜び・元気	いろいろな世代がいて当たり前							
自己充足感、高揚感、園児の愛らしさ、和み・癒しという肯定的感情			気力の喪失、嫌悪感、身体への不安という否定的感情	子供時代、孫・ひ孫の世話や育児体験の回想				
子どもを見る視線や表情の変化 高齢者の精神活動の変化		交流後の活発な態度		高齢者の経験を想起する場				高齢者への子どもの自然な対応 高齢者から与えてもらうことによる子どもの自主性の高まり 子どもの他者に対する心の成長
うつ傾向の改善 快適度と安定度の向上					身体の痛み改善			
							高齢者を活動的で力強いと感じる	
うつ傾向の強い高齢者の改善								児童の読書推進への効果
うつ傾向にある者の改善会を楽しむに待つ余韻を味わう		参加者（高齢者、子ども）が主張をする				会を楽しみに待つ余韻を味わう		子どもの発言が増える高齢者・子どもが自分の役割を認識してできることをする
楽しさ生き生きとした気持ち						楽しさ		
							高齢者に対する肯定的イメージ	
					握力向上			
孫と一緒に参加を楽しみにしている		開催日に病気をしないように気を付ける				子供たちが毎回楽しみにし興味を持つ		進んで後片付けを手伝うようになる
							高齢者はお友達をたくさん持っているという肯定的イメージ	
交流中の痴呆老人の表情の豊かさ								

*文献に示されている用語をそのまま使用した

のすべてを明記しているものはみられなかった。以下に、18件の文献における世代間交流の成功につながる企画の要素を述べる。

- (1) 実態調査については、ニーズ調査を実施した文献が1件であった。
- (2) パートナー提携については、大学や小学校等の教育機関とした文献が6件、特別養護老人ホーム等の高齢者施設5件、保育園等の保育施設4件、自治会等の地域の自治組織1件、自治体とした文献が2件であった。
- (3) ねらいについては、高齢者にはヘルスプロモーション、小学生には高齢者理解の促進とした文献が1件であった。
- (4) 企画については、交流頻度を週2回とした文献が3件、1～2週間に3回とした文献が1件、月1回とした文献が1件、月4回とした文献が1件、2か月3回とした文献が1件であった。1回あたりの時間を15～30分・45分等の1時間程度とした文献が4件、90分・2時間30分とした文献がそれぞれ1件であった。場所を保育所とした文献1件、老人ホーム等の高齢者施設とした文献が2件、内容を両世代の希望を取り入れるとした文献が1件であった。
- (5) 人材募集については、小学校でのボランティア活動を行っている人を募集した文献1件、看護教員や看護を学ぶ学生ボランティアを募集した文献1件、地域のボランティアを募集した文献1件、ボランティア募集イベントをして広く募集した文献1件であった。
- (6) 参加者とスタッフの事前準備については、安全と衛生や感染症対策、転倒転落のリスク把握等とした文献が3件、高齢者や子どもの心身状態のアセスメントとした文献2件、活動内容の周知やリハーサルとした文献が4件、養成セミナーや事前説明会とした文献が2件、ボランティア等のスタッフの健康診査とした文献2件、専任スタッフを配置した文献が1件であった。
- (7) 実践内容については、散歩や挨拶等の日常的交流とした文献が2件、歌や食事等の行事を通じた交流とした文献が5件、コミュニケーション促進ゲームやお手玉、娯楽を通じた交流とした文献が3件、絵本の読み聞かせとした文献3件等であった。
- (8) 継続的な支援については、7回とした文献が

1件、3～5年とした文献が1件、10年間とした文献が1件であった。

- (9) 効果測定については、15件の文献中に見出すことができなかった。

2) 高齢者と子どもの世代間交流の成果

高齢者と子どもの世代間交流の成果について報告しているものは15件であった(表5)。以下に、15件の文献における高齢者と子どもの世代間交流の成果を述べる。

- (1) 高齢者への世代間交流の成果を記述した文献は、11件であった。
- (2) 子どもへの世代間交流の成果を記述した文献は、8件であった。

3) 高齢者と子どもの世代間交流の利点

高齢者と子どもの世代間交流の利点については、世代間交流の利点とされる6つの要素と、それらに該当しない利点がみられた(表6)。以下に、15件の文献における世代間交流の利点を述べる。

- (1) 子どもにとって家族や学校だけに限定された人間関係の拡大については、2件の文献に示されていた。
- (2) 高齢者の社会的孤立を防ぐについては、1件の文献に示されていた。
- (3) 高齢者の能力・英知・経験の社会的活用については、2件の文献に示されていた。
- (4) 交流を通じての地域社会の統合については、3件の文献に示されていた。
- (5) 歴史的・文化的交流を継承については、1件の文献に示されていた。
- (6) 社会問題の解決については、文献を見出すことができなかった。
- (7) 世代間交流の利点の6つの要素に該当しない利点が抽出され、カテゴリ化を行った。その結果、高齢者については、楽しみ等の肯定的感情とした文献が10件、様々な世代がいて当たり前という認識とした文献が1件、活動性の向上とした文献が3件、嫌悪感等の否定的感情とした文献が1件、子ども時代や子育ての回想とした文献が2件、身体の改善・向上とした文献が2件であった。子どもについては、楽しみとした文献が3件、高齢者に対する肯定的イメージとした文献が3件、自主性の高まりとした文献が4件であった。

Ⅵ 考察

高齢者と子どもの世代間交流についての研究の動向、それらの実態と成果、利点を整理した結果に基づき、高齢者と子どもの支援における課題、および今後の研究の方向性を考察する。

1. 高齢者と子どもの世代間交流の実態とその成果

高齢者と子どもの世代間交流の実態を、世代間交流の成功につながる企画に沿ってみていくと、実態調査については、ニーズ調査を実施していた文献が1件であった。この理由として、世代間交流の成功につながる企画のパートナー提携が示しているように、育児サークルや自治会等、様々な個人・団体が運営できることから、このような結果に至り、世代間交流の成功につながる企画のねらいを明示していた文献が1件であったことにも関係すると考えられる。また、企画については、交流頻度と時間、場所を示していたが、高齢者や子どもの障害や疾病を含めた、対象者の状況を明らかにしたものは見られなかった。交流頻度は、週単位、および月単位とした文献が、各々3件、および6件であり、交流時間は1時間程度とした文献が4件であった。加えて場所は、保育所や高齢者施設とする文献が2件であった。そして、人材募集については、ボランティアとしている文献が4件であった。実践については、歌や食事等の行事を通じた交流とした文献が7件であったが、内容を両世代の希望を取り入れるとした文献が1件であった。これらは、参加者の希望を取り入れることを推奨しつつも、ねらいや時間によって実践が異なってくることを示していること⁸⁾と重なる。これらは、世代間交流を設定するにあたり、高齢者と子どもに、障害や疾病を含め、どのような課題があり、どのような要望があるのか、世代間交流によって解決可能かどうかを見極め、それに沿って世代間交流のねらいを定めて解決を目指して支援をしていくためには欠かせないといえる。

参加者とスタッフの事前準備については、安全と衛生や感染症対策、転倒転落リスク等の健康状態の情報把握とした文献が7件であった。この理由として、高齢者は加齢により免疫機能の低下が生じ易感染性であり、また子どもは免疫機能を獲得するまでに様々な感染症に罹患しやすく、両者ともに感染に注意を要する。さらには集団で交流することによって感染拡大の可能性もある。加えて高齢者は様々な

疾病に罹患し、身体可動性が障害されている可能性があることも考えられ、運営者が特に配慮している現状を反映したものと考えられる。

継続的な支援については、3～5年とした文献が1件、7回とした文献が1件であった。世代間交流は、1960年前後の産業構造の変化による人口の都市集中・地方の過疎化が促進される中、核家族化という家族形態の変容によって生じた、家族による教育力の低下が問題視されたことから生まれたとしている。この時期は、日本の伝統や文化の次世代への伝承と高齢者の社会的孤立の防止を主な目的とし、取り組みも少なかったとされる⁹⁾が、我が国の施策の歴史の中で世代間交流が確かに位置づけられてきたことを考えると、明らかになっていない世代間交流の現状も存在すると思われる。

2. 高齢者と子どもの支援のための課題

世代間交流の利点に沿ってしてみると、世代間交流の利点に該当しない成果が見出された。高齢者については、楽しみ等の肯定的感情とした文献が10件であり、子どもについても、楽しみとした文献が3件であった。一方、嫌悪感等の否定的感情とした文献が1件あった。このような肯定的・否定的感情は、どのようにして生じるのかについては明らかになっていない³⁰⁾。世代間交流で生じる感情は、肯定的感情だけではなく、否定的感情をも含めて検討していく必要があることが示唆された。これらの感情が高齢者や子どもにどのような影響を及ぼすのか、世代間交流の成功につながる企画のどの要素と関連があるのかについて明らかにすることで、世代間交流の意義が明確となるとともに、高齢者と子どもを支援するための取り組みのあり方を再考できると考える。

3. 高齢者と子どもの世代間交流についての今後の研究の方向性

1) 研究目的と研究デザインからの方向性

高齢者と子どもの世代間交流について、選定された文献総数は20件であった。これらが高齢者と子どもに関する世代間交流の文献について分けてみると、高齢者に関する文献は19件、子どもに関する文献は6件であった。また、掲載年別にみると、高齢者に関する文献は、2002年から発表され、2017年が3件と最多であり、子どもに関するものは、2006年から発表され、2017年が2件と最多であった。世代間交流は、1980年頃から都市化・過疎化がさらに加速し、核家族化・単身家族化・個人化傾向が強まる

中で⁵⁾、高齢者の生涯学習・生きがい対策として1988年に発足した高齢者の生きがい促進総合事業に「世代間交流事業」として名称が用いられるようになったこと³¹⁾、また1993年に総務庁老人対策室が行った世代間交流に関する調査研究の結果をもとに「高齢者との世代間交流の手引き」が作成されたこと³²⁾、そして2001年の高齢社会対策大綱に対策のひとつとして世代間の連携強化が明記された背景がある。このような背景があり、子どもに関する文献より早い時期から高齢者に関する世代間交流の文献を見出だすに至ったと推測する。また、子どもに関する世代間交流の文献の推移については、2009年の中央教育審議会答申に、小学校・中学校・高等学校家庭科の改善の基本方針のひとつに社会の変化への対応を挙げ、高齢者との交流や地域との連携を重視することを明記したこと³³⁾が影響したと推測する。しかし、子どもに関する世代間交流の文献が高齢者に関するものの半数にも満たなかったことは、これらの知見の蓄積が急務であることがいえる。

また、20件の対象文献における研究目的から、高齢者と子どもの世代間交流の実態に着目した研究、高齢者と子どもの世代間交流の成果に着目した研究、高齢者と子どもの世代間交流の利点に着目した研究の3つに分類された。これらの3つの分類をみると、高齢者と子どもの世代間交流の実態についての文献は18件であった。その理由として、世代間交流が様々な個人・団体が多様な内容を実践できることの影響が推察できる。しかし、世代間交流の成功につながる企画の各要素を見てみると、要素をすべて満たしている文献、それらの要素の中の実態調査や効果測定項目を満たしている文献は見当たらなかった。このことから、高齢者と子どもの世代間交流において、世代間交流の成功につながる企画のどのような要素が高齢者と子どもに影響を及ぼすのか、どのような影響を及ぼすのかについて関連を検証することが必要と考える。また、実態調査や効果測定を実施することにより、明確な課題のもと世代間交流が実施でき、その課題が解決できたかについて世代間交流の運営を見直すことができる。

そして、20件の対象文献における研究デザインに焦点を当てると、量的研究が11件であった。このことから、世代間交流に関する要素が明らかになっており、一般性のある知見を生み出していると考えられる。しかし、これまでの研究は高齢者と子どもと

の交流の行動的側面に焦点が当てられ、その背後にある高齢者の心の動きについてはほとんど検討されていなかったとされており³⁰⁾、本研究の結果においても、世代間交流の利点に該当しない要素が導き出されていることから、まだ解明されていない世代間交流に関する要素が存在すると考えられる。特に、子どもに関する文献は6件であり、子どもの世代間交流に関する知見が見出されることによって、少子化の社会の中で、子ども、あるいはその家族の支援が可能となるといえる。

2) 世代間交流の利点と社会的課題からの方向性

世代間交流の利点の社会問題の解決とした文献は見出すことができなかった。これは、世代間交流の成功につながる企画における実態調査、ねらいを見出すに至らなかったことにつながると思う。しかし、我が国には少子高齢化という重要な社会問題に直面している。少子高齢化に関する現行の対策について、高齢化については地域包括ケアシステム、少子化については健やか親子21（第2次）を策定している。これらの対策に共通するものは、人々が日々の生活を営む地域であり、この地域をどのようにつくっていくのかが焦点になるといえる。世代間交流は、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動であり、これを活用することによって、少子高齢化という社会問題の解決の一助となりうると考えたが、本研究の結果が示すように、様々な個人・団体が多様な内容を実践しており、継続性についても明らかにしているものはわずかであった。これらから、どのような運営をしているのかについては、その個人・団体に委ねられていることがわかる。そのため、世代間交流をどのような対策の中に位置づけ、地域全体の中で世代間交流をどのように活用するのかについて、国あるいは地域全体としての取り組みも検討できると考える。

また、今回は用語の定義に記しているように、高齢者と子どもに限定したことで結果に影響し、青年・中・高年世代が関係する世代間交流の実態と成果を見出すには至らなかった。これらの世代の実態や成果が明らかになれば、地域を構成する一員である子どもから青年、中・高年世代が、連続性の繋がりの中で、ひとや社会にどのように役に立ち、どのような地域づくりが実践されているのかについて解明できたことも予想でき、これらことが今後の課題といえる。

Ⅶ 結論

本研究は、本邦における高齢者と子どもの世代間交流について報告されている20件の文献を概観し、研究の動向、試みの実態と成果を整理し、今後の研究の方向性、高齢者および子どもへの支援についての示唆を得ることを目的とした。

1. 高齢者と子どもの世代間交流について報告された文献は、高齢者と子どもの世代間交流の実態や成果に着目した文献に分けられ、子どもに関する世代間交流の成果を明らかにした研究は少なかった。
2. 高齢者と子どもの世代間交流の実態とその成果については、世代間交流の成功につながる企画の要素をすべて明記しているものはなかったことから、世代間交流のどのような要素が高齢者や子どもに影響を与えているのかについて検証が求められる。
3. 今後、高齢者や子ども、その家族に対する支援のあり方については、青年、中・高年世代が連続性の繋がりの中での世代間交流を検討することが必要である。

本研究に取り組むにあたり、御指導と御助言を賜りました熊本保健科学大学保健科学部看護学科教授多久島寛孝先生に深謝いたします。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 1) 三重野英子：高齢者の暮らしを支えるヘルスケアシステム。最新老年看護学第3版，水谷信子編，日本看護協会出版会，p361，2016。
- 2) 藤内修二：保健医療福祉制度の変遷。標準保健師講座・別巻1 保健医療福祉行政論，藤内修二，医学書院，pp37-38，2017。
- 3) 内閣府：高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（概要）。2015，<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/index.html>。〔2018.8.15アクセス〕
- 4) 内閣府：家族と地域における子育てに関する意識調査。2015，http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/index_pdf.html。〔2018.8.15アクセス〕
- 5) 糸井和佳，亀井智子，田高悦子他：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果。日本地域看護学会誌，15（1）：33-43，2012。
- 6) 金森由華：高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—。愛知淑徳大学論集（福祉貢献学部篇），2：69-77，2012。
- 7) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性。現代のエスプリ，444：5-8，2004。
- 8) Nancy Henkin, Jeanette Bressler：“世代間交流の促進”成功の秘訣。社会教育，717：20-23，2006。
- 9) 草野篤子：インタージェネレーションの歴史。現代のエスプリ，444：33-41，2004。
- 10) 和田希美，西村昌記：世代間交流が高齢者のジェネラティビティと精神的健康に与える影響。東海大学健康科学部紀要，23：45-55，2018。
- 11) 田中直子，齋藤泰子：世代間交流施設における利用者評価 高齢者と子育て世代の母親の語りから。武蔵野大学看護学研究所紀要，12：21-29，2018。
- 12) 村山 陽，竹内瑠美，山口 淳，他：【世代間の葛藤と多世代共生】 幼老複合施設における世代間交流の可能性と課題。老年社会科学，38（4）：427-436，2017。
- 13) 南部登志江：高齢者と子どもの世代間交流の意義 大阪府下および奈良県下の高齢者ケア施設職員と保育士へのインタビュー調査。日本看護福祉学会誌，22（2）：233-244，2017。
- 14) 小林美奈子，森田久美子：世代間交流を導入した高齢者うつ予防プログラムの開発 笑いヨガとタッピング・タッチの活用。四日市看護医療大学紀要，10（1）：1-10，2017。
- 15) 糸井和佳，亀井智子，田高悦子，他：地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 CIOS-E, CIOS-Cの信頼性と妥当性の検討。日本地域看護学会誌，17（3）：14-22，2015。
- 16) 安永正史，村山 陽，大場宏美，他：短期集中的な世代間交流プログラムが児童に与える影響 SD法による高齢者イメージの検討。応用老年学，8（1）：14-22，2014。
- 17) 亀井智子，山本由子，梶井文子：聖路加式世代

- 間交流観察 (SIERO) インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討. 聖路加看護学会誌, 17 (1) : 9-18, 2013.
- 18) Kamei Tomoko, Itoi Waka, Kajii Fumiko, et al : Six month outcomes of an innovative weekly intergenerational day program with older adults and school-aged children in a Japanese urban community. *Japan Journal of Nursing Science*, 8 (1) : 95-107, 2011.
- 19) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他 : 高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及効果 世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” から. *日本公衆衛生雑誌*, 57 (6) : 458-466, 2010.
- 20) 亀井智子, 糸井和佳, 梶井文子, 他 : 都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12ヵ月間の効果に関する縦断的検証 Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて. *老年看護学*, 14 (1) : 16-24, 2010.
- 21) 花井篤子, 高澤直哉, 上田知行 : 多世代間交流を目的とした水中運動プログラムの開発. *北翔大学短期大学部研究紀要*, 47 : 39-45, 2009.
- 22) 立松麻衣子 : 高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策 高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究. *日本家政学会誌*, 59 (7) : 503-515, 2008.
- 23) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 他 : 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 “REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. *日本公衆衛生雑誌*, 54 (9) : 615-625, 2007.
- 24) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他 : 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” の1年間の歩みと短期的効果. *日本公衆衛生雑誌*, 53 (9) : 702-714, 2006.
- 25) 増田安代 : 住民主体の子育て支援活動への検討. *日本看護学会論文集 看護総合*, 37 : 439-441, 2006.
- 26) 土永典明, 岡崎利治 : 世代間交流に関する調査研究 高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から. *九州保健福祉大学研究紀要*, 6 : 27-34, 2005.
- 27) 新田淳子, 緒方泰子 : 世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観 介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義. *日本看護福祉学会誌*, 10 (1) : 90-91, 2004.
- 28) 片岡万里, 千浦淑子, 森本 恵, 他 : 世代間交流による痴呆老人の生活の質 (QOL) に対する効果の研究. *大和証券ヘルス財団研究業績集*, 25 : 168-173, 2002.
- 29) 菅谷泰行 : 老人福祉施設における世代間交流に関する実態調査報告 近畿2府4県でのアンケート結果の分析. *介護福祉学*, 21 (2) : 122-129, 2014.
- 30) 村山 陽, 高橋知也, 村山幸子, 他 : 高齢者における「世代間のふれ合いにともなう感情尺度」作成の試み 高齢者の心身の健康との関連. *厚生*の指標, 61 (13) : 1-8, 2014.
- 31) 文部科学省 : 「我が国の文教施策」(昭和63年度) 生涯学習の新しい展開. 1988, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198801/hpad198801_2_029.html. [2018.9.1アクセス]
- 32) 総務庁長官官房老人対策室 : 高齢者との世代間交流の手引き, エイジング総合研究センター, 1994.
- 33) 文部科学省 : 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申). 2009, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf. [2018.9.1アクセス]

(平成31年1月7日受理)

Study of articles on Intergenerational Program between elderly people and children in Japan

Mariko SUMI, Yoko KINOSHITA, Hiroe FUKUNAGA

Abstract

This study aimed to examine 20 articles reporting on Intergenerational Program between elderly people and children in Japan, organise the research trends, analyse the actual status and outcome of trials, and thereby suggest trends for the future and support measures for elderly people and children.

1. Although articles on Intergenerational Program between elderly people and children were classified as those focusing on status or outcome of Intergenerational Program between elderly people and children, very few studies elucidated the outcome related to children.
2. No article has elaborated all the requisite elements for successful Intergenerational Program between elderly people and children. Therefore, it is necessary to verify what kind of elements of intergenerational interaction are affecting the elderly and children.
3. In the future, it is necessary to consider the Intergenerational Program between the elderly, children, and their families, as well as between the middle aged and older generations in continuity.